声が聞きたい

Voice えひめ

ひと月の県人

「古里」への贈り物(上)

感謝の言葉 歌に乗せ

2009年12月15日夕。八幡浜市真網代、真穴中学校の校門そばに、同校生徒や同じ敷地にある真穴小学校の児童らがサクラの若木3本を植えた。傍らの木柱碑には「ふるさと真穴に感謝を込めて」の文字と、贈り主であるミカンアルバイター経験者ら8人の名前。子どもや教職員が1人ずつ、シャベルで木に土をかける。植樹を終えると、エレクトーンの伴奏でカントリー風の歌の合唱が始まった。

♪ この町にはオレンジ色の笑顔があるから
悲しみ置いて君もおいで
僕たちのふるさとへ

真穴の自然の美しさ、人情の温かさ、そしてそれらに対する感謝の気持ち。「オレンジ色のふるさと」は1999年、ミカンアルバイター事業開始5周年を記念し、アルバイターから寄せられたメッセージなどを詞にまとめて作られた。地元ではなじみ深いメロディーだ。

08年に真穴中教頭として赴任した脇坂耕三(46)は、同年11月の学校行事で初めて耳にした。どういう経緯で作られたのか不思議に思う一方、何げなく歌う生徒を見て気になった。「この子たちは、歌に込められた思いを理解しているのだろうか」

教職員が話し合い翌年2月、少年の日の行事としてアルバイター経験者を招き「ふるさとコンサート」を開いた。子どもたちに歌が生まれた事情を知ってもらうとともに、県外出身のアルバイターの目に真穴がどう映ったかを通じて、古里の意味を考えてほしいと考えた。

この時訪れた元アルバイター5人の中に、同中にサクラを贈った草薙卓(32)=さいたま市=もいた。

10年ほど前、真穴で農家や同年代の若者との出会いを通して、人生の道筋を見いだした。道端で会うと元気にあいさつしてくれる子どもたち。都会では消えつつある「当たり前の」ことに救われた。コンサートもサクラの寄贈も、思い出の地に「少しでも恩返しを」との思いからだった。

ミカンアルバイター経験者有志らから贈られたサクラの若木を植樹する子どもたち=2009年12月15日、真穴中学校

❀

八幡浜市真穴地区のミカン収穫を支えるミカンアルバイター。農作業による充実感や自然の美しさ、人情に触れた若者たちは地元に確かな足跡を残し、また全国に散らばっていく。1月の「Voice えひめ」は、愛媛を後にしたミカンアルバイターたちの軌跡などを随時追う。

(森田康裕、文中敬称略)